



## 第2回 科研費セミナー

# 「東アジアの食文化史を考える」

【日時】 2023年2月21日(火) 13:30-15:30

【形式】 オンライン (Zoom)

※ 事前登録不要、参加自由

【Zoom】 <https://us02web.zoom.us/j/81542110315>

I D : 815 4211 0315

パスコード : 7yX42YFB

### 【趣旨説明】

13:30-13:40

久保田 慎二 (熊本大学国際人文社会科学研究センター)

### 【発表①】

13:40-14:25

大川 裕子 氏 (上智大学文学部史学科)

「中国農書と救荒書を通して見る「非常の食」と「日常の食」」

### 【発表②】

14:25-15:10

村上 陽子 氏 (上智大学史学会会員)

「史資料からみる中国古代の食」

15:10-15:30 質疑

### 【主催】

科研費・基盤 (B) 「中国初期王朝時代における土器利用の複雑化とその背景に関する多角的研究」 (代表: 久保田 慎二)

科研費・国際共同研究強化 (A)

「中国新石器時代から初期王朝時代における土器と栽培植物利用に関する学際研究」 (代表: 久保田慎二)

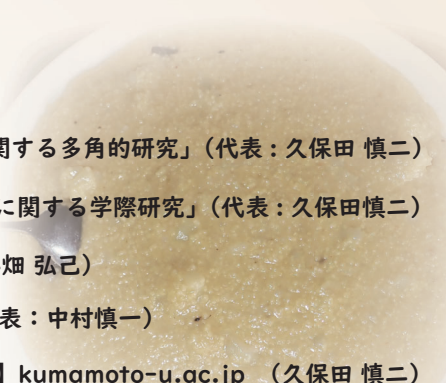
### 【共催】

熊本大学国際人文社会科学研究センター 新資料学・歴史理論領域 (領域長: 小畑 弘己)

科研費・基盤 (C) 「歴史的環境から見た明清農書の研究」 (代表: 大川裕子)

科研費・学術変革 (A) 「中国文明起源解明の新・考古学イニシアティブ」 (代表: 中村慎一)

問い合わせ: [jiu-bao-tian](mailto:jiu-bao-tian) 【アットマーク】 [kumamoto-u.ac.jp](mailto:kumamoto-u.ac.jp) (久保田 慎二)



## 【発表①】

大川 裕子 氏（上智大学文学部史学科）

### 「中国農書と救荒書を通して見る「非常の食」と「日常の食」

中国では飢饉が繰り返し起こり、そのたびに多くの餓死者や流民が発生した。歴代為政者たちは社会の安定を維持するために熱心に飢饉対策に取り組んだが、その根底には徴税の基本である穀物（アワ・キビ・イネなど）を重視する伝統的価値観が存在した。一方、飢饉に直面する人々の間では穀物に頼らずに饑饉を乗り切るための様々な工夫がなされてきた。例えば、山野の野生植物の利用や、根菜・蔬菜・果樹などを備荒作物として栽培して飢えを回避しようとする試みである。このような自然資源の活用や、穀物以外の作物の利用は、民間においては緊急時だけでなく、日常的に蓄積されてきた経験的知識であったと考えられる。本報告では、飢饉発生後における緊急的な食の対応を記した救荒書と、平時の農業生産に関する知識を集積した農書の記載をもとに、「非常の食」と表裏一体を成す「日常の食」について考えてみたい。

## 【発表②】

村上 陽子 氏（上智大学史学会会員）

### 「史資料からみる中国古代の食」

仏教思想「十悪」の一つ「貪欲」。その欲は五欲に代表され、その一つが「食欲」である。つまり、人心と食欲とは切り離せないものであり、だからこそ史料に「倉廩實則知禮節，衣食足則知榮辱」（『管子』牧民。管仲は春秋時代の齊の桓公に仕えた宰相）や、「洪范八政，一曰食，二曰貨」（『漢書』食貨志上）とあるように、政治の安定と食の安定が同列に語られ、農本思想の政策が執られてきた。それほどに中国に於ける食とその生産の位置づけは重いが、その一方で政治（税収等）から離れた蔬菜や調理法となると、途端に正史等には見えづらくなる。そこで本報告では、食材については農書を含めた文献史料から、料理方法は墓中から出土した簡牘やレリーフから、およそ前後漢を中心に600年頃までの食について概観したい。